ロ・サクソン的近代、或ひはイギリス的近代としての色彩が濃厚である事を認めるならば、大東亞新秩序の建設と云ふが如き世界史的建設の爲めには、我々の存在の「アンチテーゼとしての」イギリス帝國の分析こそ、焦眉の急を要する、亦否應なく對決しなければならない問題である事は今更ことあげる迄もない事であり、本書が誕生しなければならない譯でもあつた。

著者は年來重商主義やイギリス經濟史の諸問題について造詣深く、屢々示唆に富める論究を學界に贈られたのであるが、今回は特に立派な書物としてイギリス帝國の分析を世に問はれるに到つた事は、時節柄と云ひ、殊にイギリス帝國の世界史に占める位置が文化よりも一層經濟の領域に卓越する事を考へるならば、よく人を得たる喜びは一入である。

著者は先づ「イギリス帝國の構造及びイギリス帝國主義」なる章を設けて、イギリス帝國の基本構造が二重的性格のものである事を指摘してゐる。即ちコモンウエルス構造の性格とその紐帶を多方面より檢討してそれが遠心的傾向をとらんとしつゝある事、及び第二の性格たる屬領帝國についての詳細なる分析が爲されてゐるのであつて、現在のイギリス帝國の性格をくつきりと浮彫して餘す所がない。然もその所說の明晰にして判明なる正に本章こそ壓卷の出來と云はるべきである。次に「世界との交渉」に於てイギリス帝國の歷史的性格が根本的に歐洲外的であつた次第を强調せられるのであるが、かゝる歐洲外的性格が既に十七世紀に先驗的に存在し然もそれが十九世紀に到る迄終始一貫、必然性を持つて展開して來た樣な印象を受けたのは獨り筆者の僻目であらうか、植民地が既に十七世紀や十八世紀初頭にイギリス國家の動向やその經濟機構とそれ程必然性を持つて結ばれてゐたかどうかは更に再考を要する問題と思はれるのであつて、今少しく偶然性を考慮するの必要がなからうか、最後の「イギリス帝國及び帝國主義の生成」に於ける經濟理論と經濟政策との關聯や「印度支配の發展」及び「アフリカ及び東亞への侵略」等の諸問題は、勤きつゝある歷史に直接するが故に、興味津々として盡きず、殊にイギリスの植民地擴大の常套手段たる尖兵としての特許會社から政府の支配への移行の如き、その謀略を衝いて餘す所がないのであつて吾等の日々の歷史建設に資する所多大なるものあるは疑ひを容れないのである。敢へて江湖に推賞したい。（甲文堂書店發行、定價貳圓四拾錢（豐田堯）

ベーリング海（新世界叢書）

小葉田亮著

「山崎大佐を隊長とする二千數百名のアッツ島守備部隊は、五月十二日以來寡兵克く優勢なる敵に對し血戰繼續中のところ、五月二十九日夜、壯烈なる最後の攻擊を敢行し全員玉碎、傷病者にして攻擊に參加し得ざるものは之に先だち悉く自決せり……。」ラジオの報ずるこの悲壯極まる大本營發表に血潮の逆流を覺えたのは本稿締切の前日、五月三十日の夕刻であつた。丁度その日、私はこの紹介執筆のために小葉田氏の著書を机上に展げ、アリューシャン方面の地圖をも參照しつゝ靜かにまた讀返へしてゐた時であ

る。時も時、このときの感銘を私は終生忘れ得ないことであらう。顧みれば昨年六月七、八日、皇軍の奇襲上陸以來滿一ヶ年、本書の著者はその時の感激を靜かに抑へつゝ克明な記述の筆を進めてゐるのである。北洋に對する吾人の關心は米英に對する鬪魂と共に、かゝる悲喜兩面を通じて昂まり行くのである。

戰ひ正にたけなはなる日米兩國の間に、汪洋として横たはる太平洋、その太平洋は南に擴がり北に狹い。太平洋の兩岸大陸が呼べば答へんばかりに近接した所、それがベーリング海に外ならない。また、今や只の氷海としての存在に止まらなくなつた北氷洋が我等の太平洋と息吹き交はすところ、それがベーリング海である。してみれば、この海域には何か獨特の性格が潜むであらうことは想像に難くない。

本書の第一章は、ベーリング海とこれを繞どるアリューシャン列島、アラスカ、シベリヤ及びカムチャッカの概觀である。そこにはベーリング海といふ海を指示する言葉を借りながら、この北邊を海と陸との融合された統一あるものとして採上げてゐる著者の態度が窺はれる。第二章は北太平洋に於ける白人侵略史で、アラスカの賣却を轉機とする露國の後退、これに代る米國の進出、その間隙を狙ふ英國等、北洋に生滅する雲霧にも似た歐米列强消長の姿を詳細に描き出してゐる。最終の第三章に至つて、世界轉換期におけるベーリング海の意義が考察せられる。それはアラスカの軍備と睨み合せて米國の對日侵攻路としての檢討となり、またソ聯の北極航空路及び北氷洋航路の開拓と相俟つて、茲は北太平洋の十字路とも考へられてゐる。更に、わが北洋漁業の活舞臺としても重要な意義を擔ふのである。

北洋に關する文獻は目下のところ比較的少いと云ひ得よう。その中にあつて、眞摯な著者は卓見を披瀝しながら詳細な事實の記載にも勞を惜しまず、豐富な內容と流麗な筆致は地圖及び口繪と相俟つて、この方面に對する吾人の關心に充分應へ得る好著たらしめてゐる。著者は序文に於て「國民教養の一端に資せんとする」意圖の下に執筆したと謙遜して居られるが、卷末には參考書十數册を掲げ、短いながらその解說をも附記せられてあり、一般人のみでなく地理學專攻者にとつても好適の參考書として敢て一讀を薦めたい力作である。（昭和十八年二月、目黑書店、B6版一五四頁、定價壹圓貳拾錢）（三上正利）

ラングーン・カルカツタ（新世界叢書）

淺井得一著

印度に關する圖書の洪水の中で、淺井得一氏の數篇の著作は正に激流に抗する雄々しき樹木のやうな觀がある。その樹木は決して背高くはないし、又頑强な太さを持つてゐるものでもない。然し乍らその根强さと溢れ出づる火の如き熱情とは、如何なる激烈の奔流をも自己の指し示す方へ向はせずば熄まぬ氣魄を表してゐる。世界地理政治大系の一册として「印度」をものし、異色ある卓見を以て印度に就いての俗說を打破した著者が、尙も迷蒙醒め難きものへの彈丸として精魂を傾けた逝りが、此の「ラングーン・